

鶴嶺湖四十八区「川柳」が詠む ツーリレーキ隔離収容所の生活

桑井輝子

はじめに

本稿の資料である鶴嶺湖四十八区川柳吟社発行の「川柳」(上下2巻)は、上巻100頁、下巻80頁足らずの手書き原稿謄写版印刷である。「序」の日付けは、昭和二十年十二月九日、発行人は「北米合衆国加州鶴嶺湖戦時隔離収容所内 四十八区川柳吟社四八〇二-C 米岡日章」、日米戦争終結による収容所閉鎖の期日が告示され、誤字脱字を直す間もないほど急いで句集を作成したとある。

鶴嶺湖四十八区川柳吟社は米岡日章(大)主宰の、おそらくは十名ほどの小さな川柳吟社であった。閉会期にはわずか数名であったろう。米岡日章は、1930年代末に、加州毎日新聞川柳欄選者であった阿世賀紫海のもとで川柳をはじめたが、ロサンゼルス川柳界の主導的存在ではなかった。収容所では他のメンバーが初心者であったために同会の選者となったのであろう¹。清水其蝸(丁)が主導するジェローム(Jerome)強制収容所のしがらみ吟社²や、森田玉兎(理一)が選者のマンザナ(Manzanar)収容所の満座那川柳句会、上野鈍突(稗)、市川土偶(縫三郎)を擁するミニドカ(Minidoka)収容所の峰土香川柳吟社のような、各地から投句を集められるような有名吟社ではなかった³。ツーリレーキ(Tule Lake)収容所のなかでも、48区に限定された川柳吟社であった。とはいえ、ツーリレーキ収容所が隔離収容所となる1943年秋から、日本の敗戦を経て、収容所閉鎖の迫る1945年10月10日までの週一回の句会記録である点で、川柳の句としての評価とは別に、隔離収容所の普通の人々の「生活の記録、感情の詩」として、社会史の史料価値があろう。本稿では、この句会記録に掲載された句に依拠して、隔離収容所での生活と心情を探る。

ツーリレーキ隔離収容所

ツーリレーキ隔離収容所は、戦時転住局(War Relocation Authority)⁴管轄の日系人強制収容所の一つで、オレゴン州との州境に近いカリフォルニア州北部ニューウェル近辺に設けられた。カスケード山脈の一角にあり、標高1200メートル、太古には湖底であったというのが、砂漠のような砂地で、セージブラッシュが生える程度である。近くには狩猟で有名なツーリレーキ(Tule Lake)があり、これが名称の由来になっている。また遠くに富士山のような山容のシャスタ山(Mt. Shasta)が望める。インディアンの古戦場であるキャッスルロック(Castle Rock)と、

鮑のような形のアバロニ山（Abalone Mountain）が特徴的風景を形成している。

開設当初は、カリフォルニア州サクラメント郡、ワシントン州キング郡、プレーサー郡、ピアス郡、オレゴン州フードリヴァー郡、ユーバ郡から立ち退いた日系人11,000人ほどを収容した。しかし、1943年春、「忠誠登録」が実施され、「忠誠」ではないと判断された日系人の比率が戦時転住局管轄収容所10カ所中最も高い比率を示したので、同収容所が「不忠誠」な日系人を収容する「隔離収容所」となった。

「忠誠登録」とは、戦時転住局と陸軍省が、1) 防衛上問題のないと認められた日系人を収容所から出所させ、防衛地区外に「再定住」させる、2) 被収容者から志願兵を集める、ことを主な目的に、1943年2月から3月に実施したアンケート調査である。質問項目は多岐にわたるが、要は日本とのつながりの程度を調べ、その程度によってアメリカへの忠誠度（出所の適否）を測る内容であった⁵。とくに質問項目27、28⁶をめぐって収容所内は混乱し、深い亀裂を日系社会に残したといわれる。調査実施の過程で、「不忠誠」な「問題分子」を隔離する構想が発展し、ツーリレーキがその隔離施設に選定された。1943年夏以降、「不忠誠」な人々をツーリレーキに集め、「忠誠」な人々をツーリレーキ以外の収容所へと、移動が行われた。収容人員は、18,000にふくらんだ。

しかし、この「隔離収容所」に収容されたのは、実際には、アメリカ合衆国を「敵国」だと意思表示した人々だけではなく、日本に「帰りたい（行きたい）」と希望した人々、アンケートへの答えを拒否した人々、個人の履歴に問題があった人々、そして、ただ単に、さらなる移動を希望しなかった人々など、「不忠誠」の度合いには、大きな幅があった。結果的に、この「不忠誠」の違いが「隔離収容所」内に新たな問題を生む一因となる⁷。

隔離収容所となる

鶴嶺湖四十八区川柳句会は、おそらく1943年11月に始められた⁸。収容所間の移動が進行中の時期である。最初のころの句会では、

何事も今日を限りの朝を起き 大下 （1回）
柵越えて隔離普請を急ぐ日々 鶴美 （2回）
建増しへ平和の遠い感があり 静江 （2回）
隔離所は意外な人に会はさせる 田村 （3回）

と詠まれている。大下の句は、移動する朝の様子を詠んだのであろう。鶴美や静江の句は、他の9カ所の収容所から移入する人々を受け入れるためにバラックが増築される様子を詠んでいる。収容所の拡大と警備の強化⁹に、戦争がまだまだ続く憂いを感じられる。田村の句では、まさかこの人も「不忠誠」だったのか、と戦前の言動からは想像できない人との再会を詠んでいる。「忠誠登録」とは、人間関係のしがらみのなかで回答を強いられた。「不忠誠」はその人の選択だったかもしれないし、不承不承の選択だったかも知れない。それは句の読み手もわからない。

隔離収容所として、二重柵が設けられ、軍隊まで配備されていた。こうした厳重な警備体制を

柵内から見れば、いよいよ「敵国人」となったと思ったであろう。とはいえ、次の句をみると、

山屏風めぐらしてゐて二重柵 照子 (17回)

その警備体制を馬鹿馬鹿しいことだと批判しているかのようである。カスケードの山々に囲まれ、誰も逃げ出そうなどとは思わないのに、という感情が「ゐて」という二文字から伝わってくる。

戒厳令下

当局側は敵国人収容所の管理体制を敷いた。配給の食糧や石炭は極端に不足し、当局の横流しがあるのではないかとの疑いが被収容者の間に広まった。待遇の改善を求める被収容者代表者と当局との対立が暴力化するなかで、11月4日、軍隊が導入され、戒厳令が敷かれた。

犠牲者を出して黎明近くなり 大下 (1回)

霧深く眠れる夜半に銃の音 田村 (4回)

軍装のサーチ気寒い霧の朝 橋本 (4回)

このままで何時まで暮す収容所 節子 (4回)

騒然としたなかでトラックの横転事故があり、犠牲者が出た。「暴動」では装甲車も出動して収容所内は騒然とした。軍隊の力で騒動は収まったかにみえたとはいえ、収容所内の生活は、冬に向かう厳しさのなかで、物質的にも精神的にも、追い詰められたかのような日々であったろう。それでも、

苦しさも心構で修養所 初子 (4回)

隔離所で希望抱いて待つ平和 鶴美 (4回)

まさに「しかたがない」と開き直り、強制収容所を「修養所」と逆転させ、そこから前向きに生きようとする一世のしなやかな強さが感じられる。鶴美の思い描く「希望」とは、日本の勝利であろう。彼らのなかには、

今は只祖国の母の無事祈り 田村 (7回)

富士見んと隔離住ひに持つ希望 照子 (7回)

待遠い帰国差出す誓願書 川上 (17回)

日本への帰国の日を待ちわびる人々がいた。川上が提出した「請願書」とは日本への交換船帰国希望である。合衆国政府は、日本人移民を戦時捕虜交換要員に数えたのである。日本への帰国を希望する人々の子どもたちは、

語学熱二世の胸に甦り 照子 (7回)
一年生からやりなほす日本行 村田 (18回)

「国民学校」へ通い、修身も含めた日本式教育を受けた。ガリ版刷りの教科書が今も残っている¹⁰。そうした人々にとって、アメリカへの「忠誠」を示した人々は、

子の志願親の希望を打ち砕き 田村 (7回)
子の故に誇も捨てた老移民 照子 (10回)
昔日の友も祖国へ弓を引き 林 (13回)

林の詠むように「裏切り者」に思えたであろうが、田村や照子の句には、忠誠登録にイエスと答え、アメリカ軍に志願するという「親不孝」な子を持った人への哀れみも感じられる。子供の意思に従い、心ならずも、イエスと答えてしまった友人へのさげすみも感じられる。

生活の安定

1944年1月15日になってようやく戒厳令は解除された。その時にまでに、多くの「トラブルメーカー」は逮捕され「スタックード」と呼ばれる拘留所に収監されたが、これらの事件を詠み込んだ句はない。次々と家宅捜索と逮捕を続ける当局への警戒があったのかもしれない。あるいは48区川柳社のメンバーが、彼らの活動とは一線を画していたことを示しているのかもしれない。

初明りされど戒厳令下なり 日章 (9回)
戒厳令解けてうれしい柵の中 山邨 (16回)
禁足令解けてうれしく明朗化 村田 (19回)

戒厳令が解除されて、収容所生活が「正常」に戻ったことを「明朗化」だとしている。被収容者にとって戦争の行方は気がかりであったが、情報は混沌としていた。

快ニュースまさかデマとは信じ兼ね 田村 (12回)
新聞はどちらも勝ったニュース欄 橋本 (12回)

日本からの短波放送が伝える「快ニュース」と、アメリカのマスコミが伝える戦局は違いすぎた。やがて混乱のなかにも生活は日常化してくる。そうしたなか、日米戦時交換船で「祖国」日本から「在外同胞」へ「慰問」の茶、味噌、薬、本などが送られ、各収容所に配布された¹¹。

真情に溢る祖国の慰問品 小谷 (13回)
慰問品見たばかりで頭が下がり 節子 (16回)
慰問品うれしく受けて祖国偲び 日章 (16回)

有難く啜る慰問の茶の香 照子 (16回)

祖国より慰問感謝にせまる胸 田村 (16回)

一億の心をこめた慰問品 勇軒 (18回)

日本の人々が自分たちを気遣ってくれた、と思うだけで感謝の念が湧き出してくる。その気持ちが異口同音に詠み込まれている。

心の余裕は、身の回りを快適にしようとする努力に繋がる。

一坪の庭も^{あお}緑ます驟雨晴 照子 (20回)

丹精はブラクの砂に花咲かせ 橋本 (47回)

いい声が漏れるブラクの日本風呂 橋本 (47回)

丹精が実るブラクの牛蒡畑 橋本 (47回)

庭が「我が家」の前に作られ、日本風呂が設置される。問題のあった食堂の食事も、

鐘の音で何処のブラックと子等も知り 山村 (47回)

ぞろぞろと鐘を相図のメス通ひ 妙祥 (40回)

落ち着きが感じられる。

城山は雪のシャスター隠して居 林 (17回)

区によって眺めも違ふシャスター山 小谷 (47回)

千軒の屋根しろじろと月の冴え 白雀 (41回)

春空へ歓声揚るホームラン 川上 (18回)

土まみれ忘れてマブル遊ぶ子等 倉本 (47回)

収容所住めば都の昨日今日 村田 (45回)

色々な免状貰ふ収容所 妙祥 (49回)

張切った体操姿朝の声 妙祥 (38回)

区民みな体操あとの塵拾ひ 妙祥 (47回)

生活の余裕は、収容所の風景を楽しみ、子供らの遊びを喜ぶ気持ちを生む。さまざまな趣味の会が生まれ、修了書をもらう。妙祥の詠む朝の体操はツーリレーキ隔離収容所の朝の風景であった。精神と肉体の鍛錬のため、報国青年団員¹²が鉢巻きをして、わっしょいの掛け声でグラウンドを走り、体操をした。

生活が落ち着いてきたとはいえ、満足していたわけではない。

戦争の犠牲となって収容所 倉本 (33回)

敵国と云ふ名へ二世も柵の中 妙祥 (39回)

聖戦の意義辨へて隔離の身 小谷 (39回)

月々を只食ひ眠る収容所 文子 (48回)

柵隅に犠牲となつた墓の数 山邨 (33回)

日米戦争の結果とはいえ、二世までもが敵国人扱いを受けて収容される現実を、妙祥は直視している。小谷はしかたないと考えている。文子の句には、あてがい扶持の生活に人生を空費する焦りが感じられる。その間にも亡くなる人々がいる。「柵隅」という言葉に、わびしさが伝わってくる。

イエス・ノー選ぶ自由のペンの先 白雀 (40回)

囀りの窓に明るい俺が朝 川上 (40回 題 自由)

繰り返し行われるヒヤリングと呼ばれる「真意」確認作業、答えを書くのは自由だが、その結果どうなるかはわからない。白雀の句には、アメリカ政府への不信が滲んでいる。川上は、隔離の身にも、何人も奪えない自由がある、と誇っている。明るい朝、窓から聞こえるさえずり、この朝のすがすがしさを満喫している自分の心を奪えるものは誰もいない、と詠む川上の心性に、どのような状況下でも、前向きに生きようとする「竹の人々」のしなやかな強さを感じる。以上が上巻に収められた句である。

日本化

下巻は51回、1944年11月3日、明治節の句会記録から始まる。その日、

東空へ最敬礼の明治節 桃林 (51回)

鉄柵の中も仰げる碧い空 日章 (51回)

晴れ晴れとした気分が詠み込まれている。しかし翌52回は「是が非か」の題に、

兄隔離弟は米軍に武勳なり 倉本 (52回)

市民権二世は取捨の是非に迷ひ 村田 (52回)

不動産あつて二の足ふんでゐる 妙祥 (52回)

と、被収容者の複雑な胸中が詠まれている。倉本の句が詠むように、兄弟が忠誠、不忠誠に分かれることは珍しくなかった。1944年7月1日ローズヴェルト大統領が、戦時中でも国籍離脱を可能とする国籍法改定に署名すると、村田が詠むように、市民権を放棄するか否か、二世は再び岐路に立つことになった。最終的には約6000の申請があり、約5500が受理された。妙祥の詠むのは、外国人になれば農地などの財産を失うかも知れないという迷いであろうか。あるいは、日本への

「帰国申請」であるのかもしれない。

同様に収容所内の人間関係の複雑さは、

兄は兵妹は出所姉は嫁き 桃林 (67回)

二途は帰る祖国と残る人 村田 (67回)

柵一重へだて別れし忠不忠 豊流 (67回)

隣でも維持と打破で打解けず 桃林 (58回)

と詠まれている。桃林の最初の句には、家族がちりぢりになってゆく、親のわびしさが感じられる。彼の最後の句に詠み込まれている「維持」と「打破」とは、1943年11月の騒動に際して、当局との対立姿勢を継続しようとする「現状維持派」と対立路線を変えようとする「現状打破派」を指している。一年が過ぎても、隔離収容所となったころの対立が根深く残っていることを物語っている。アメリカに「不忠誠」の人々がまとめられたはずの、隔離収容所でも、さらなる「隔離」が進行していた。

1944年秋までには、隔離収容所のなかで「日本」への純化は進んでいた。

若人の朝の体操へ覗く窓 村田 (54回)

凍る息わっしょわっしょと勇ましい 柳陰 (57回)

わっしょいと子等暁の霜を踏み 桃林 (57回)

天を衝く意気運動へ霜を踏み 柳陰 (64回)

紅白に分れて競う優勝旗 清美 (64回)

海拔1200メートルを超える高地の冬でも、早朝から、報国青年団の若者は、日本式の朝の体操を行い、「わっしょい」と掛け声をかけながら、運動場を駆け回った。一世はその若さを頼もしく思ったのであろう。清美の句は、国民学校運動会の様子を詠んだものである。運動会は戦前からの日本語学校の伝統であり、盛り上がったことであろう。運動会の他にも

センターで見る楽しみの映画の夜 倉本 (69回)

娘の踊母見とれてる演芸会 藤田 (69回)

娘等は皆オーダブックの絵に見とれ 花子 (69回)

家々のポーチそれぞれ趣味の型 文子 (72回)

根気よく水汲み通ふ花畑 文子 (78回)

楽しみは、ささやかであるが、気持ち一つで事欠くことはなかった。

西海岸への帰還許可

1944年12月18日、連邦最高裁判所はミツエ・エンドウ訴訟に対して「忠誠」者の強制収容を違

憲とする判決を下した。その前日、政府は集団強制収容を撤廃すると発表し、翌年1月から徐々にではあるが日系人の西海岸帰還が始まった。

解放令思ひ思ひに西東 桃林 (70回)
転住を誘ふ新聞日々に見え 豊流 (77回)
帰還した同胞弾丸へ安からぬ 豊流 (80回)
外住と定めねばならぬ閉鎖令 桃林 (88回)
運命は又西東閉鎖令 桃林 (90回)
閉鎖後のそれから先が案じられ 桃林 (87回)
決心は十六弗に甘んじる 日章 (88回)

豊流が詠むように、帰還した日系人への放火や発砲事件が報道され、慣れ親しんだ西海岸へ帰るか、それとも子の誘う東か、悩ましい問題であった。日章の句は、収容所内の月16ドルの仕事を続けること、言い換えれば、まだ出所しない決意を詠んだものである。甘んじるという言葉に、搾取的安月給だという気持ちが示唆されている。

隔離収容所においても、前述したように、息子や兄弟、あるいは親戚、友人が志願や徴兵でアメリカ兵になっている場合もある。

傷兵で帰へれば人種差別され 桃林 (71回)
散った子の手柄を抱いて淋しく居 柳陰 (73回)
運命は敵で散る子を賞られず 柳陰 (90回)

桃林の句は、二世兵士に対する一般社会の差別を詠んだものであるが、柳陰の最初の句からは、親日本派の周囲に遠慮して、肩身が狭い親の哀しみが詠み込まれている。次の句は、親の心に反して志願した子に対する、「不忠誠」者の友の想いであろう。

敗色濃厚の今となつては、

請願の帰国は船を待つばかり 白帆 (87回)

白帆の句は、あくまでも日本からの迎えの船を待つだけだと、開き直る心境が詠まれているが、強がりのようにも、あきらめのようにも思われる。

隔離収容所に住むことは、日本を選択したと思われてもしかたない。

一億が進む東亜の新天地 柳陰 (79回)
遙拝に浮ぶ高嶺の新東亜 白堂 (79回)
精神の力国難打破き 豊流 (85回)
運命を祖国と共に己が意志 豊流 (90回)
運命の坩堝二万の肝と肝 日章 (90回)

実際に四十八区川柳吟社のメンバーは、親日本であった。「わっしょい」の運動と共に東方遙拝は恒例であった。日本の精神力の高さはアメリカの物質力を破るという気持ちもある。隔離収容所の2万の人間が、故国の人々と心を合わせ、日本の勝利を祈る。

しかし戦局は日本にとって厳しさを増すばかりであった。

暇の身は思ふ祖国の空襲下 柳陰 (61回)
デマ宣へ馴切つてゐる面構 白堂 (66回)
夕焼に胸迫らせる祖国難 豊流 (89回)
総決起孤島の島に血を流し 白堂 (90回)

英字新聞の伝える本土空襲の記事、デマだと一笑にふす、悠然たる態度をとる人々が少なくなかったことを白堂の句は詠んでいる。

戦局とは別に、ツーリレーキ収容所の暮らしは、表面的には小日本のようであった。

満月へ団扇たたいて盆踊 白帆 (86回)
国難の電波の中に夏相撲 豊流 (91回)
夕暮れてアバロニ山にのぼる月 日章 (89回)

戦局とは別に、ともかくも雨露が凌げる家があり、日に三度の食事がもらえる。豊流の句には、なんとのおきな、とあきれる気持ちを感じられる。しかしそうした生活を続けることに、

世の進歩遠く眺めて隔離の身 豊流 (79回)
変る余を他処に二重の柵の中 日章 (63回)
三年越し矛盾だらけの世に生きる 藤田 (71回)
碧瑠璃の湖水は枯れて収容所 白堂 (90回)

世の動きに取り残される焦燥感が豊流、日章の句から伝わってくる。白堂の句は、紺碧の満々とした水をたたえていたはずの湖が、枯れ、収容所になったという、自然史的事実を述べた句ともいえるが、枯れて、という言葉に、青雲の志をもって渡米したはずの自分の人生もたそがれて、収容所に収監される末路だという、哀しみも感じられまいか。1945年9月には日系人に対する軍事規制は解かれ、ツーリレーキを除き他の収容所は1945年秋に次々と閉鎖された。

敗戦

結局日本は戦争に敗れた。8月15日¹³に行われた92回の句会では、

三年の間を覆した講話説 日章 (92回)

一億の理想の中に我も在り 日章 (92回)

と、講話説への驚きと、あくまでも日本人として故国日本と共にある決意が日章の句に読み取れる。翌週には、

停戦に寝られぬ夜半へ壁に月 豊流 (93回)

壁洩れて祖国の声が引寄せる 柳陰 (93回)

「停戦」の報にあれこれと思い悩む気持ちが詠まれている。「敗戦」とはいわず、「停戦」という言葉に、「敵国人」として「隔離収容所」で3年がんばってきた意地が感じられる。柳陰は、隣室の短波ラジオの声に聞き耳を立てているのであろう。「壁洩れて」という言葉から聞こえないもどかしさが、故国を気遣う不安感と重なってくる。豊流は壁に差し込む月光の美しさに見とれている。敗戦で負け犬になって、これから先をあれこれ案じて悶々としているときに、壁の月に気がつく。すべてを失っても、この月の神々しさは変わらない。ほっと一息つけるような安らぎの訪れを感じる。

9月までには敗戦の日本の状況がはっきりと伝わってくる。

空高く響く喇叭の音は止り 桃林 (95回)

神の力も及ばなんだか祖国の空 桃林 (95回)

興廃は原子爆弾にと定まり 桃林 (95回)

東天を涙で仰ぐ平和の日 豊流 (95回)

尊音に従順空を涙で見 桃林 (95回)

「わっしょい」の運動時には高らかに響いていた報国青年団の喇叭の音は止んだ。神風が最後には吹くと言われていたのに神風は吹かなかった。待ちに待った平和は、日本の敗北だった。桃林の三番目の句からは、戦争を決したのは日本人の精神力の不足ではなく、結局は原子爆弾という新武器だった、という強がりも、あきらめも伝わってくる。「忍びがたき忍ぶ」辛さをこらえるのが、アメリカにある日本人のせめてもの務めだという気概が桃林の最後の句から伝わってくる。この句はまた、玉音放送を聞いたという話を裏付けている。

このころまでには川柳吟社のメンバーは少なく、句の数もわずかとなる。

ツール湖の記念木細工員細工 日章 (99回)

住む家も無いに閉鎖の日まで定め 桃林 (97回)

日本行きか、アメリカに残るか、ともかくも収容所の閉鎖は決まった。多くの人々は出所の荷物に収容所で作ったさまざまな品々を詰め込んだ。

人々が去った後には墓は無縁塚となる。

宿命に淋しく残る無縁塚 桃林 (94回)

民族の歴史に残る記念塚 (豊流 98回)

100回目の節目の句会が最後の句会となった。

四十八区植えた柳へ百の枝 桃林 (100回)

血の誇戦史へ残る百部隊 桃林 (100回)

百までの努力金では買へぬもの 日章 (100回)

日章の句には、ともかくも100回も句会を重ねたことを詠んだものであろう。日本は敗れたが、3年余を空費したが、戦前に築いたものは失ったが、この句集は金では買えない。その達成感、成果をまとめた満足感が伝わってくる。

終わりに代えて

川柳はそのときどきの生活の感慨を詠んでいる。時事吟として社会史の資料となり得る。鶴嶺湖四十八区川柳吟社の「川柳」は川柳そのものの句集としての評価は高くないかもしれない。とはいえ、悲しみ苦しみのどん底のなかで、生活を見つめ、他人が奪うことのできない自分の「宝」を句にしてゆく、そのしなやかな強さを示す句を見つけたことができた。また、収容所の一区画で独自の結社が生まれ活動したことを物語る文献として評価もできる。他の収容所や抑留所でも、収容所を代表する短歌、俳句、川柳の結社の他に、一角で結社が活動したことであろう。それらが廃棄される前に保存の道を確保したいものである。そして収容所における日本語文芸活動の全容を後世に残したいと願っている。

注

1. 「雅号を語る」『川柳つばめ』1960年6月号によれば、日章の雅号は阿世賀紫海に1940年正月につけてもらったという。WRA（戦時転住局）の記録では、1916年渡米、独身であった。『川柳つばめ』は1930年代末から、戦中を除き、2000年代までロサンゼルスを中心に活動した川柳吟社の機関誌である。
2. 同収容所が閉鎖され、其甥がヒラリヴァー強制収容所に移送されると、しがらみ吟社もヒラしがらみ吟社となった。
3. ツーリレーキ隔離収容所には、ツールレーク川柳吟社や川柳筏も存在したが、句集は未見である。
4. War Relocation Authority は日米開戦後、F B I等の情報機関が逮捕し、軍や司法省の抑留所に収監した日本人移民指導者を除く、日本人移民（合法的居住者）および日系アメリカ市民、約11万人を収容した。
5. 拙論「戦時転住所からの『再定住』—日系アメリカ人の忠誠をめぐる一覚書」『長野県短期大学紀要』47号（1992年）177-188参照。
6. 質問27 “Are you willing to serve in the armed forces of the United States on combat duty, wherever ordered?” 質問28 “Will you swear unqualified allegiance to the United States of America and faithfully defend the United States from any and all attack by foreign or domestic forces, and forswear any form of allegiance to the Japanese Emperor or any other foreign government, power, or organization?” 質問27は合衆国軍に従軍する意思を、28は合衆国へ無条件の、唯一の忠誠を誓うかを問

うもの。合衆国に帰化できない一世には、日本国家への反逆を要求することになる。二世に対しては政府の命令に無条件で服し、従軍することを意味した。

7. 隔離収容所に関しては、村川庸子との共著『日米戦時交換船・戦後送還船「帰国」者に関する基礎的研究』(トヨタ財団助成研究報告書 1992年); "Skeleton in the Closet"--The Japanese American Hokoku Seinen-dan and Their 'Disloyal' Activities at the Tule Lake Segregation Center during World War II--," *The Japanese Journal of American Studies*, No. 7, September 1996, 67-102参照。
8. 第一回には日付けの記載がない。下巻の追補には第一回1943年11月10日とあるので、11月10日と判断した。
9. 二重柵が設けられ、戦車が周囲を取り囲み、監視体制が増強された。
10. たとえば、UCLA Research Library, Special Collectionなどに所蔵されている。
11. 交換船については、注7参照。交換船が運んだ慰問品については、『慰問品うれしく受けて』一戦時交換船救恤品からララ物資へつなぐ感謝の連鎖―『JICA横浜 海外移住資料館研究紀要』2号(2008年1月) 11-24頁参照。
12. 「報国」とは、一日も早く「帰国」し国に身を報じたいと思う団員の意志を示している。報国青年団に関しては注7参照。
13. アメリカの対日戦勝は時差の関係で14日である。

鶴嶺湖四十八区「川柳」が詠むツーリレーキ隔離収容所の生活

| 日付 | 回 | |
|------------|----|--------|
| 1943.11.10 | 1 | ストーヴ |
| 1943.11.10 | 1 | 朝 |
| 1943.11.17 | 2 | 普請 |
| 1943.11.24 | 3 | 自惚れ |
| 1943.11.24 | 3 | 意外 |
| 1943.12.1 | 4 | 霧 |
| 1943.12.1 | 4 | 収容所 |
| 1943.12.9 | 5 | 凍る |
| 1943.12.9 | 5 | 母 |
| 1943.12.15 | 6 | 雪 |
| 1943.12.15 | 6 | 掃除 |
| 1943.12.22 | 7 | 希望 |
| 1943.12.22 | 7 | メスホール |
| 1943.12.29 | 8 | 風邪 |
| 1943.12.29 | 8 | 父 |
| 1944.1.3 | 9 | 元日 |
| 1944.1.3 | 9 | 平凡 |
| 1944.1.12 | 10 | 初便 |
| 1944.1.12 | 10 | 子 |
| 1944.1.19 | 11 | 外套 |
| 1944.1.19 | 11 | 妻 |
| 1944.1.26 | 12 | 新聞 |
| 1944.1.26 | 12 | 丸いもの一切 |
| 1944.2.2 | 13 | まこと |
| 1944.2.2 | 13 | 友 |
| 1944.2.9 | 14 | 挨拶 |
| 1944.2.9 | 14 | 時計 |
| 1944.2.16 | 15 | 依頼 |
| 1944.2.16 | 15 | 独立 |
| 1944.2.26 | 16 | うれしい |
| 1944.2.26 | 16 | たまらない |
| 1944.3.4 | 17 | 未知 |
| 1944.3.4 | 17 | 山 |
| 1944.3.21 | 18 | 一 |
| 1944.3.18 | 19 | 朗か |
| 1944.3.18 | 19 | 朧月 |
| 1944.3.25 | 20 | 電気 |
| 1944.3.25 | 20 | 雨 |
| 1944.4.5 | 21 | 靴 |
| 1944.4.12 | 22 | 菓子 |
| 1944.4.19 | 23 | キャンテン |
| 1944.4.26 | 24 | 巡査 |
| 1944.5.3 | 25 | 言葉 |
| 1944.5.10 | 26 | 少し |
| 1944.5.17 | 27 | 世の中 |
| 1944.5.24 | 28 | 力 |
| 1944.5.31 | 29 | 苦心 |
| 1944.6.7 | 30 | 夏 |
| 1944.6.14 | 31 | 日用品 |
| 1944.6.21 | 32 | 浴衣 |
| 1944.6.28 | 33 | 犠牲 |
| 1944.7.5 | 34 | 涙 |
| 1944.7.19 | 36 | 思出 |
| 1944.7.26 | 37 | 不思議 |
| 1944.8.2 | 38 | 姿 |
| 1944.8.9 | 39 | 仕方がない |
| 1944.8.16 | 40 | 自由 |
| 1944.8.23 | 41 | 月 |
| 1944.8.30 | 42 | 欲しい |

| | | |
|------------|-----|--------|
| 1944.9.6 | 43 | 秋風 |
| 1944.9.13 | 44 | 恩 |
| 1944.9.20 | 45 | 今日 |
| 1944.9.26 | 46 | 使命 |
| 1944.10.4 | 47 | ブラック |
| 1944.10.11 | 48 | つまらない |
| 1944.10.18 | 49 | 貰ふ |
| 1944.10.25 | 50 | 熱 |
| 1944.10.25 | 51 | 空 |
| 1944.11.8 | 52 | 是か非か |
| 1944.11.15 | 53 | どうしよう |
| 1944.11.22 | 54 | 窓 |
| 1944.11.29 | 55 | 娘 |
| 1944.12.6 | 56 | うらやましい |
| 1944.12.13 | 57 | 冬 |
| 1944.12.20 | 58 | 隣 |
| 1944.12.27 | 59 | 話 |
| 1945.1.3 | 60 | 活動写真 |
| 1945.1.10 | 61 | 暇 |
| 1945.1.17 | 62 | 鶴 |
| 1945.1.24 | 63 | 変わる |
| 1945.1.31 | 64 | 運動 |
| 1945.2.7 | 65 | 五分五分 |
| 1945.2.10 | 66 | 反対 |
| 1945.2.21 | 67 | 別れ |
| 1945.2.28 | 68 | 会ふ |
| 1945.3.7 | 69 | 見る |
| 1945.3.14 | 70 | 思ふ |
| 1945.3.21 | 71 | 矛盾 |
| 1945.3.28 | 72 | 形 |
| 1945.4.4 | 73 | 淋しい |
| 1945.4.11 | 74 | 手 |
| 1945.4.18 | 75 | 青葉 |
| 1945.4.25 | 76 | 見舞 |
| 1945.5.2 | 77 | 誘ふ |
| 1945.5.9 | 78 | 骨折 |
| 1945.5.16 | 79 | 進む |
| 1945.5.23 | 80 | 危い |
| 1945.5.30 | 81 | 光 |
| 1945.6.6 | 82 | 夕立 |
| 1945.6.13 | 83 | 珍しい |
| 1945.6.20 | 84 | 数 |
| 1945.6.27 | 85 | 救ひ |
| 1945.7.4 | 86 | 団扇 |
| 1945.7.11 | 87 | それから |
| 1945.7.18 | 88 | 決心 |
| 1945.7.25 | 89 | 夕方 |
| 1945.8.1 | 90 | 運命 |
| 1945.8.8 | 91 | 相撲 |
| 1945.8.15 | 92 | 忙しい |
| 1945.8.22 | 93 | 壁 |
| 1945.8.29 | 94 | 緑 |
| 1945.9.5 | 95 | 空 |
| 1945.9.12 | 96 | びくびくする |
| 1945.9.19 | 97 | 無理 |
| 1945.9.26 | 98 | 記念 |
| 1945.10.3 | 99 | 視察 |
| 1945.10.10 | 100 | 百 |